

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

風に乗って届いた声

石川県 白山市立白嶺中学校 三学年

上田 有悟

「こんにちはー。」

ある夏の日、一体何百人の人が触ったら、こんなにも塗装が剥げてしまうのだろう、とつい思ってしまう祖母の家の扉の取っ手をつかみ、僕の大好きな祖母の家の、少し木の匂いがする暖かい空気を吸いこみながら、僕は祖母の家を訪ねた。

「はーい。あら、よく来たね。」

ガラガラ、という扉を開ける音と同時に、祖母の声が聞こえた。どうやら僕が来たことを喜んでいららしい。

僕は上田の姓を名乗っているが、これは父方の姓で、母方の姓は太田という。この日訪れたのは母方の家で、母にとってみれば実家である。古い家だが、子どもが多かったこともあってか、造りは立派である。

「とりあえず上がりまっし。」

石川独特の方言で語りかけられ、妙に安心感を覚える。奥に入ると祖父がいた。僕は、

「今日はよろしくお願いします。」

と言った。まるで神様か仏様のような笑顔を祖父は返してくれた。まばゆい。

祖父はパーキンソン病である。立ったりはできるが、言葉が正確に発音できず、歩く時にも少しぎこちない。そんな祖父に僕が会いに来た理由。一つは「孫」の顔を見て元気になってもらうため。もう一つは、この太田家の調査のためだ。

物心ついた時から古いものが好きだった。祖父から古いお札をもらうと、おもちゃをもらった時の子どものようににはしゃいでいた。そして、最近ではこの家の歴史を調べている。古いものは好きだし、何よりこの家の歴史を知ることが、いろいろお世話になった祖父母への恩返しになると考えているからだ。家の蔵に資料を探しに入ったこともある。

祖父が、そばに置いていた箱を僕に渡してくれた。かなり古そうだ。「それ、この間おじいちゃんが自分で蔵の二階まで上って持ってきて

## 第55回中学生作文コンクール

くれたんだよ。」

そう祖母が言った。後ろに座っていた母が驚愕の表情を浮かべた。祖父にとって蔵の二階まで行くのは容易いことではないはずだ。僕でさえ、あの急で今にも壊れそうな階段を上った時は足がすくんだ。祖父が大変な思いをしてまで僕に渡したかったもの。何だろうと思いい、箱を開けた。

中に入っていたのは大量のはがきだった。目を疑うほどぎっしりと書かれたはがきの表には、軍事郵便、検閲済の印、そしてこの文字が書かれていた。「満州国」。間違いなく、戦死した僕の先祖のものであった。

はがきには自分の妻と、母、そして弟とその娘を思う心が書かれていた。時候の挨拶で始まり、どのはがきも最後は「サヨナラ」という文字で終わっていた。皆が病にかからぬかと心配しているものもあった。礼儀はしっかりと守り、かつ愛を忘れぬ人の姿が、そこにはあった。

この人は昭和十三年に戦死している。この年はちょうど国民健康保険法の旧法が創設された年だ。恐らく、家族の健康と生活をずっと心配しながら、死んでいったのだらう。そう思うと、なんとというか、死んだ僕の先祖に諭されている気になる。奇しくも僕の父方の祖父も保険会社に勤めていたので、なおさら命の尊さを教えられている気分だ。

今この国には保険がある。生命保険の世帯加入率は九十パーセントだ。昔の人々には想像もできなかった社会になっていると僕は思う。僕の先祖も、もし保険があったらもっと安心だったと思う。日本人の平均寿命は年々延びている。そうすると、予期せぬことも増える。だからこそ、保険の有り難さを感じ、深く知る必要が今あるのではないか。そう、どこからか風に乗って声が、僕の胸に届いた気がした。